

# 「豊洲ユニバーサルデザイン探検隊 ーみんなにやさしい豊洲の街を目指してー」プロジェクト

代表者 | 中村広幸【教授】（工学部共通学群）

構成員 | 任龍在（工学部非常勤講師・群馬大学教育学部准教授）／河野純大（工学部非常勤講師・筑波技術大学准教授）／吉本浩二（工学部非常勤講師・富士通）／岡本明（工学部特別招聘講師）

## プロジェクトの概要

豊洲は、様々な人々の暮らしや働く場であるとともに、多くの人々が訪れる街。豊洲には、子供、子育て世代、中・高年、障害のある人、外国からの人など、多様な人々が生活している。

「多様な人々が生活したり訪れる街」という観点で見た時、豊洲には優れた点が多いが改善すべき点もある。

本プロジェクトは、学生と地域住民が共に、バリアフリーやユニバーサルデザインの観点から豊洲の街の良い点や改善点を見だし、体験し、理解し、次代の豊洲の街づくりに役立てる試みである。

## COC活動の成果

### ■たとえば「歩道と公開空地で確保した広い歩行空間」

新しい街区の広い歩行空間。多数の街路樹も多くの人にゆとりある街並みを与える。余裕をもって通行でき、車椅子やベビーカーの利用者が使いやすい。

一方で、視覚障害者には歩行の手がかりが少なく、一人で歩くことが困難。しかし、ガイド役となる点字ブロックが十分ではない。街路樹の枝が目の高さにあり、見える人には危険は少ないが視覚障害者には大きなリスク。また、自転車と歩行者の分離が不明確。歩行者を縫うように走る自転車。自転車事故がしばしば起きている。高齢者や視覚障害のある人にとってはヒヤヒヤ。

### ■他者を理解する

2020年のオリンピック・パラリンピックには、海外から多くの障害者を含む多様な人々が訪れる。今は元気でも、年を重ねると誰でも身体機能が低下する。怪我をして、しばらく体の一部が動かないこともある。ベビーカーでも移動に制約が生じる。誰もが「障害者」になる可能性がある。住む人、働く人、訪れる人、みんなにやさしい豊洲の街にしていけるためには、一人ひとりが他者を理解することが重要。

### ■豊洲ユニバーサルデザイン探検隊

2016年度は11月19日に第1回探検隊を実施した。車椅子で普段生活している人を隊長に、隊員は車椅子に交替で乗ったり、ベビーカーを利用したりしながら豊洲の街を回った。探検後は、それぞれに見つけたこと、考えたこと、今後どう活かしていくかなどを話し合い、普段では気付かないことに気付かされた。

また、11月24日には「福祉と技術」の授業に地域住民も参加し、改めて議論を行った。



メトロの券売機。コンビニのATMも同様だが、車椅子だと見上げることで画面が読み取りにくく、操作しづらい



豊洲駅バスターミナル近くの歩道。柵や障害物が多く車椅子では通りにくい



“探検”実施後、見つけたものについて、良い点、改善点などをグループに分かれて議論した